



緑豊かで静かな農業の町大分県宇佐市安心院（あじむ）町を訪れました（写真1）。左党の人なら、本格焼酎「いいちこ」の会社がある町としてご存じかもしれません。この地で、トヨタ財団国際助成プログラム「楽しい農業 ー演劇ワークショップでアジアの農村をつなぐ」（代表：地球研阿部健一教授）の発表会が、9月27日に安心院高校との共催で行われました。安心院高校は、小中高校連携一貫の「地球未来科」という12年間のコースを創設して、地域から地球の課題を学ぶというすばらしい試みを始められています（写真2）。さて、このプログラムは、日本、フィリピン、東ティモールの世界農業遺産にかかわる地域を舞台に、これからの農業を担う高校生に、自然とかかわってきた豊かな歴史を踏まえた魅力のある未来の農業の姿を、演劇ワークショップとその成果の分かち合いを通して語ってもらおうという、ちょっと変わったユニークな試みです。「地球未来科」にぴったりの企画とも言えそうです。

その中で、安心院高校の生徒たちのまったくの自作自演による短い演劇は、とても興味深いものでした。あらすじは以下のとおりです。

養豚を営む家の女子高生が、学校で、髪の毛が豚臭いなどと、同級生のいじめに会っていた。その女子高生は、豚は好きだが、いじめが理由で、家業は手伝いたくない、継ぎたくないと思いつつも、悩んでいた。そんなある日、可愛がっていた子豚が、彼女の夢の中に現れ、『私たち豚は、最後は人に殺され、食べられてしまうが、それは仕方がない。でも、生きているあいだだけでも、豚らしく生きたい。』と訴える。家の養豚場は、コンクリの狭い畜舎で、身動きもできない状態でただエサを与えられ、太らされているだけだった。（現在の日本の養豚場の大部分は、そのような状態のようです。）ただ、彼女がいろいろと勉強したところ、放牧場のような広い草地で豚は自由に動き回り、自然のエサを食べて成長している養豚場もあることがわかった。彼女は両親に訴え、説得し、豚も満足するこのような開放的な養豚場経営をめざそうと頑張る決意をする。

ストーリーはこれだけですが、『豚らしく生きたい』というメッセージには、人と畜産の根源的な関係性を考えさせ、感銘を受けました。安心院町から帰ると、詩人・文学者の管啓次郎氏による「動物の命を思う夏」と題するエッセイを日経新聞の文化欄で見つけました。その中で、福島原発事故のため、40頭の乳牛を牛舎に縛り付けて置き去りしたまま避難せざるをえなかった乳牛酪農家の話が紹介されていました。数か月後、牛舎に戻るとすべての牛の死体は蛆と蠅に埋まり、一頭の母牛が死ぬ前に産んだらしい子牛1頭だけが生き残っていたとか。牛舎のどの木の柱も激しく齧られており、牛たちが繋がれたまま飢えで苦しみながら死んでいったことを物語っていた。「なんとも強烈なイメージだ。ヒトは人類史の全体にわたり、他の動物たちを徹底的に利用しながら生きてきた。狩り、食い、飼い、奪い、働かせ、死体を利用し、かわいがり、いじめ、動物たちの命をほしいままにして。だが、すべてがすべてに関係しながら生命圏が営まれる地球の有限性がここまではっきりしてきた現在、ヒトと他の動物たちとの関係を全面的に見直すことは火急の課題だ。（中略）生命という大きな約束事の中であって、近代以後の人間がやってきたことは明らかに度を超しているのではないか。死から利益を得るシステムがひたすら蔓延する現代社会から出てゆくには、生命への礼儀を学び直さなくてはならない。そのことを真剣に考えていいころだ。」と管氏はしめくり、ヒトと動物のあいだのあるべき姿についての重要な問題提起をされています。

欧米の環境団体グリーンピースが主張するような「賢いクジラやイルカを食う日本人は野蛮でけしからん。」という問題ではもちろんないですね。獣肉をやめて魚にすればいい、という問題でもありません。近年、魚の乱獲が大きな問題になっていますが、「持続可能な漁業」という視点だけでは不十分です。

詩人金子みすゞさんは、「大漁」という詩の中で、人間中心の漁業の問題を鋭く指摘しています。

朝焼け小焼けだ 大漁だ  
大羽鰯（いわし）の大漁だ  
浜は祭りのようだけど  
海の底では何万の  
鰯（いわし）のとむらい  
するだろう

私はトンカツも鶏の唐揚げもどんな魚の刺身も大好きです。だからというわけではありませんが、コトの本質は、肉も魚もやめて、菜食主義にすればいい、という問題ではないはずです。地球の生命圏を構成するすべての生きとし生けるものが、お互いにつながっている中で、ヒトの食はどうあるべきなのか。そして人類世（人新世）といわれている現在、これからの食を支える農業や水産業はどうあるべきか。私たちは今、「食べられる側の論理\*」を深掘りしつつ、古来から伝えられてきた「いただきます」と「ごちそうさま」の新しい意味を再考していく必要があります。

参考文献：

管 啓次郎（2019）：動物の命を思う夏．日本経済新聞 2019年9月29日（日）文化欄．

金子みすゞ名詩集（2011）：彩図社編纂部

本多勝一（1982）：殺される側の論理．朝日文庫 （\*このサブタイトルは、この本のタイトルを文字っています。）

写真1：大分県宇佐市安心院町の風景



写真2：[大分県立安心院高校地球未来科のポスター（PDF）](#)